

## KG かながわ第 21 回ミニ講演会 報告

日 時:2024 年 3 月 2 日(土)10 時~11 時 30 分 (終了後、懇親会)

場 所:杉田地区センターB 集会場

参加者:講演会 29 名(1958~1994 卒・うち東京支部 1 名)

講 師:高木 紀世子氏(1971 年文学部卒)

テーマ:「香道:文学をテーマに香りを聞き分ける~嗅覚の役割」

《はじめに》

今回は 60 歳で外資系企業の代表を退任された後、作家デビュー(ペンネーム;吾意在野游(あいざいやゆう))され、現在は万葉集を楽しむ会(リアル 14、リモート 2 教室:参加者約 200 名)の他、華道、茶道、香道、書道、着付の資格を活かして、茶道、香道、着付を教えておられる多才な高木氏の講演でした。

歴史的にも古く、奥の深い香道のお話に関心を持たれた方や普段高木講師の教室で万葉集などを学んでおられるなど多方面の方々が出席されました。受付は高沢副支部長(1983 文)と杉本幹事(1975 文)で、司会進行は支部会員三浦美智子さん(1975 文)が担当しました。そのあと佐藤支部長(1972 経)から高木講師が神奈川支部長時代に本ミニ講演会を立ち上げられ、開催日が第一回と同じ 3 月 2 日であったことなどを含めた開会挨拶のあとに本題講演に移りました。

《講演内容》



(香道の歴史と香について)

595 年推古天皇の時代に淡路島に大木が流れてきて村人がそれに火を点けたところとても良い香りがした。ただもの(ただ木)ではないと朝廷に献上した。時の摂政の聖徳太子はそれを香木だと認め、それで仏像を作り(残っていない)、その削りくずを仏に供えたり、自分も持ち歩いていた。これは祈りの香りである。

一方、753 年数回の苦難の旅を終え、鑑真が屋久島にたどりついた。鑑真は経典と共に練香をもってきた。ただ、この練香は日本人には臭くて使えなかったため、自分たちの好みの練香を作った。練り香は香木のくずに料理で使うチョウジやウコンに麝香(じゃこう)などを調合して「甘づら」をつなぎに使った。壺に入れ地中に6か月~1年置き取り出すとすばらしい香

りになった。調合が違うと香りも違ったので、こぞって貴族は練香を作った。その練香が発展したのは 850 年から 900 年頃。900 年以降宮廷でもよく使われるようになったので源氏物語にもよく出てくる。平安時代の香は「雅な香り」である。練香の種類は当時 100 種類ほどあったが、優れていた 6 種類は今でも残っており鳩居堂では当時と同じレシピで作られている。お香には香木と練り香があるが練り香は足が速く、香りが飛んでしまうので乾燥前に平たくして型抜きをした。それを印香(いんこう)と呼ぶ。そのため、お香は香木、練香、印香の3つになる。

(香道について)

香道は文学をテーマに香木の異同を当てるゲーム。たとえば明日(3月3日)は桃の節句なので大伴家持の桃の歌「春の苑 紅にほふ 桃の花 下照る道に出で立つ乙女」という歌が有名だが、それをテーマに「春の園」「乙女」の匂いを聞いてもらい、その後ゲームが始まる。もう一つ違う種類のお香を加え(それを桃とする)3種類を聞いてもらい、出てきた順番を当てる。文学は万葉集、古今和歌集、新古今和歌集、金槐和歌集、漢詩も入るものもある。そのゲームは 250 種類あると言われる。文学の深い知識と教養でお香を楽しむ高度な遊びだが、香道では香木しか使わない。平安時代の練り香は使わない。香道は 100 ぐ



らの流派があると言われるが志野流と御家流が2大流派。志野流から独立した香道直心流(じきしんりゅう)は練香も印香も使う唯一の流派である。(講師が所属する)

日本では茶道・華道は大多数の人がその内容を理解し、その概略の説明は出来るが香道はそこまでの広がりはない。なぜか?..お茶やお花とは違い香道のベースとなる香木の栽培が出来ないことが一番大きい。ベトナムやインドネシアなど熱帯雨林の国で倒木から何百年あるいは何千年の時間をかけて作られるもので石油・石炭の発掘と同じように長い時間がかかる。香木の最高級の伽羅を見つけるキャラハンターという仕事もある。また、香木は一回焚くと終わりになるので香木はどんどん枯渇していく。そのため値段が上がり金よりも高いとも言われる。このままでは香道がすたれていくので文科省も香道の家元も対策を考えている。

(嗅覚について)

嗅覚を司る嗅覚野と記憶を司る部位(海馬)とは薄い仕切りしかないことから、嗅覚と記憶は関連があるとされており、嗅覚を鍛えることで記憶力の劣化を遅らせることが出来る。Ex: 認知症の患者は嗅覚が衰えていて腐ったものも食べてしまう。普通は嗅覚より視覚の力が強く、嗅覚を使う前に臭いも視覚で勝手に判断してしまい嗅覚の能力がどんどん衰えていくのが実状。目を閉じてく、嗅覚だけで臭いを感じる習慣ができると嗅覚が働くようになる。香を聞く(嗅ぐ)だけで森林浴の4倍の効果があるとも言われる。嗅覚がよく働いている時、脳はメディテーション・瞑想の状態にあるとも言われ、精神的にとってもいい。嗅覚を鍛えると認知症になるのを遅らせることができるし、ストレスが緩和されるので元気で過せる。ぜひ実践してほしい。

さらに詳しくお香について知りたい方は 5/19(日)に「源氏香」の会(講師の個人講座)に参加ください。

(講演後の主な質疑応答・感想)

Q1.正倉院に保存されている蘭奢待はどのレベル?

A.香木は腐らない。沈香の伽羅より大きいが質は下。

香木は沈香(じんこう)ともいう。安いものは浮く。沈むのは伽羅。

Q2.香道は嗅覚。その感覚表現は?

A.香道には香りの表現はない。甘い、辛いなど味覚と同じ表現を使う。伽羅は辛いと言われる。

Q3. 伽羅はベトナムにもあるが香道は日本だけのものか

A. 香木の香りを文学と絡めて高尚な楽しみに発展させた香道は日本のみ。

Q4. 西洋では体臭や入浴などの問題もあり香水が発展しているが、お香も同じ意味合いもあるのか

A 平安時代は日本でも入浴は少なくその意味もあったかと思うが日本は消臭ではなくその香りを楽しむ文化であった

Q5. 大阪の迷いクジラなどからも龍涎香は採取できるか

A. クジラから龍涎香が取れる。練香にして利用する。

Q6. 香木を科学で作ることは出来ないのか

A. 香木は長い年月要して出来上がっているのが難しいと思う。

感想: 茶道をやっているが香りは目を瞑り聞くと脳にいいなど参考になった。

《おわりに》

高木講師が講演の40分間、配布物もプロジェクターで投影する資料もなく全て口頭で説明された。香道は見るものではなく聞く(嗅ぐ)のもであり、目を瞑っていても良いので聞いてほしいと冒頭に説明されたが、日ごろからセミナーや講演会はスクリーンに投影された資料を読んで話を聞くのに慣れた者にはこの奥の深い話が本当に理解出来るのか半信半疑であった。しかし、講演が始まるとすぐにその心配は杞憂に終わり、皆さん、眠気も催さず話に夢中になっていた。

確かに資料が手元にあると耳が手薄になり、大事な話を聞き逃すのかも知れません。最後に3種類のお香を用意していただきその臭いを嗅がせていただいたが、その違いは分かっていても口頭で表現するのは難しく、お香は味覚的な表現をすると話された講演の内容も理解できた気がした。香道は歴史的にも古く内容も文学、哲学的、科学的要素も含んでいる。本日は入門編でもっと奥の講座が聞きたいと思われた方も多いのではないのでしょうか。



#### 《懇親会》

講演会終了後も会場を新杉田駅近くのレストランに移して講師を囲んで懇親会を開催しました(参加者 24 人)。

講演の内容の感想も含めてお一人ずつの近況報告をいただきましたが、お一人は即興の謡曲で講師にエールを送られるなど大変盛り上がりました。最後に恒例の佐藤支部長によるエールと校歌「空の翼」斉唱でお開きとしました。

以上 【文責・事務局長 井村正和】

